

会報発刊に寄せて

岡田 淳子（北海道民族学会会長、日本文化人類学会評議員）

つい先ごろ、アラスカ人類学会からニューズレター(Alaska Anthropological Association Newsletter)が届いた。今回は毎年春に行われる研究総会の内容を知らせるもので、30巻という数字が学会結成から30年経過したことを示していた。

思い起してみると、私達がアラスカの調査をはじめた頃、州立アラスカ大学(Univ. of Alaska)やアンカレジのサザン・メソジスト大学(Southern Methodist Univ.)に赴任した米国の友人達が地域学会を作ろうと話合っていた。本土から離れているので、北方研究に軸足を置いて、研究発表の機会を増やそうという企てである。

1980年に、機会を得て単身アラスカに赴いた時、私は動き出して数年の研究総会に出席した。発表会場は一つだったが、アラスカ地域研究の大先輩デ・ラグーナ(Frederica de Laguna)を招いて、賑々しく行われていた。前夜成田を発って、朝アンカレジに着いた私は、時差の睡魔で朦朧としていたことを、後々まで反省している。

次にこの学会に出たのは2002年だが、その発展振りに目を瞠った。ホテルをほとんど借り切って、3日間3つのセッションが併行して行われ、米国本土、カナダ、ヨーロッパから研究者が集まり、以前少なかったロシアからも50人以上の人が参加していた。主催者の話では延べ3000人が集まったという。内容も多彩で、さまざまな賞が出され、研究に対して顕彰が行われた。

今回のニューズレターによれば2005年はさらに発展し、研究発表数が150を越え、地域や分野でまとまった研究ネット、際立ったプロジェクトのシンポジウム、学生のセッションなど、その内容には興味をそそられる。またニューズレター以外に、モノグラフ・シリーズも出されている。

北海道はアラスカと共通点が多い。地理的には国の中心部と離れて北方地域にあること、

歴史的にも1868年前後に国家に編入されたこと、特異な文化複合がみられることなどである。北海道民族学会を30年で同じように発展させることは難しいだろうが、取り入れられるものはあって、アラスカ人類学会はモデルの一つになると思う。

私達の北海道民族学会は、規模こそ違いが、最初、大学の研究者だけで始めた頃に比べると、文化人類学に興味をもつ学生や、周辺研究領域の人達も集まり、自発的な研究発表が増えてきた。状況は発展傾向にあるといえる。もっと多くの研究者が集まってくれば、もっと討論を交わす時間があれば、学会をリードするような研究ができればと、願いはいくらかでも膨らむ。一方、今の状態は時間的、金銭的な制約の中で、背伸びしない一つの安定した行き方なのかも知れないと思う。

このたび、幾人かの会員の提案によって「通信」を「会報」に格上げして発行することになった。久しぶりにたいへん嬉しい進展である。運営委員の皆さんにはご苦勞なことであるが、この試みがこれから伸びていく人達に発表の場を提供し、また周囲への広報になって、北海道民族学会の発展につながればと期待している。どんな歩みでも一歩一歩進みながら継続することが、財産の基盤になる筈である。

4年程前に、通信上で私は5代目の会長を引き受けたという挨拶を行った。この4年間に紆余曲折はあったが、日本文化人類学会北海道地区研究会と共同して円滑に歩みを進めることができるようになり、事務局体制も強化されて新たに走り出した。ここに会報の第1号を送り出すことができ、何事も動かす人びとの互いの理解と熱意なのだと思っている。

4年が過ぎ、私はそろそろ引退の時が近づいて来た。この会報が北海道民族学会に相応しい内容を備えて滞りなく発刊され、将来に向かいますます発展することを願って終ることとしたい。

会報発刊に寄せて

桑山 敬己（日本文化人類学会理事）

長い歴史を持つ北海道民族学会が、このたび装いを新たに『北海道民族学会会報』を刊行されるという。大変喜ばしいことであり、刊行に尽力された諸先生方および会員の方々のご苦勞をねぎらいたい。

実は私が北海道に移住したのは2003年12月のことである。つまり私はまだ新参者である。そして、右も左も分からないうちに、日本文化人類学会北海道地区の理事に推挙されてしまった。承知のように、文化人類学は民族学として知られていた時期が長く、日本では各地の郷土史家を研究主体とする民俗学と密接な関係を持って発展してきた。しかし、高度経済成長を遂げた1960年代頃から、文化人類学者の関心は日本以外の地域に移り、日本を主なフィールドとする民俗学者や、地元の郷土史家との乖離が目立つようになった。かつて民族学と民俗学は「二つのミンゾクガク」と言われたものだが、今日では死語になりつつある。だが、地域によっては、いまだに両者が密接な関係を持っている所もあり、またそれが望ましい場合もある。津軽海峡以南の日本とは風土も歴史もまったく異なり、少数民族を内に抱える北海道は、そうした地域の一つではないだろうか。

1934年設立の日本民族学会は、幾多の論争を経て2004年4月に日本文化人類学会と改称した。この状況下で、北海道民族学会が「民族学」という名前を維持しているのは、文化人類学／民族学が地元(より広義には自文化)と密接な関係を持ち続けていること示唆しているだろう。少なくとも私はそのように解釈して評価したい。たしかに、東京や大阪のような大都会の研究者から見れば、地域密着型の研究者は中央の動向に疎く、理論的精彩さ

に欠ける。しかし、文化人類学が日常生活を研究対象とする以上、現場と離れた学問は有り得ないのだから、問題はいかに北海道という地域「を」研究して、そこ「で」ものを考え、成果を外部に発信するかどうかだろう。われわれは、内村鑑三や新渡戸稲造のように、日本を足がかりに国際的舞台で活躍した偉人の多くを、北海道が輩出したことを肝に銘じたい。

私事で恐縮だが、私の母方の祖母は若いときに新潟の柏崎から北海道の小樽に来て、実業家のもとで奉公したという。また、私が北海道に来る直前に他界した父は、第二次世界大戦中、樺太と北海道に配属された。2003年10月に北海道赴任の報告をしたとき、父との最後の会話となってしまったが、そのときオトイネツという場所に父が戦時中いたことを聞いた。どういう字かと尋ねたら、字は分からないがオトイネツだと言った。その父を母は慰問しに北海道に来たという。それから60年の時を経た2004年の夏、母は終戦後初めて北海道を訪れ、大変喜んでいて。そして私自身も、若いとき11年を過ごしたアメリカに北海道が何となく似ていて、とても喜んでいる。

文化人類学はそもそも辺境の学問である。自らを周辺に置いて、中心では決して見えないうことについて刺激的な発言をしてきた。この学問に魅力があるとすれば、それは破壊的創造および再生に伴う知的興奮であろう。北海道にそれができなくて、日本のどの土地ができるであろうか。私は今後も北海道民族学会と日本文化人類学会が、力を合わせて発展することを強く願っているし、微力を尽くすつもりである。関係者の皆さま、ぜひ深いご理解とご尽力を賜るようお願い申し上げます。